

◆ 大津の仏像 — 一千年の造形 — ◆
かたち

平成9年4月26日(土)～6月8日(日)



木造聖観音坐像(重要文化財) 満月寺蔵

大津は仏教文化の聖地ともいうべき土地です。延暦寺や園城寺、西教寺、石山寺、さらには聖衆来迎寺など、古代以来の法燈を現代に伝え、多数の文化財を蔵する大寺にくわえ、中世以降の新たな潮流のなかで建立された数多くの寺院群が、当地の仏教史を華やかに彩っています。

それらの寺々に安置されて篤い崇敬を得てきた仏像も、芸術的にみて優秀な作例であり、かつ制作年代の古い尊像が多く、国・県・市等の指定文化財とされている作品の数も他の地域とは比較になりません。しかし、まだ調査の対象となつたことのない尊像もけっこう少なくはなく、それらのなかにも、指定作品に匹敵するすばらしい作品が埋もれていることが予想されます。

このため当館では、開館以来の六年余にわたり、所蔵者各位の格別のご協力をいただいて、未指定の仏像調査を実施してきました。いまだ大津市内の全社寺を調査するにはいたっていませんが、すでに多大の成果があがっています。

今回の展覧会では、この未指定仏像調査によって見いだされた優れた仏像の数々を中心に、すでに指定文化財となつていても、これまであまり特別展等での公開の機会がなかった作品をまじえて、古代から近世にいたる大津の仏像史の一千年間の流れを追ってみましたと考えています。

出品作品は、白鳳時代から江戸時代にいたる四六件(うち重要文化財九件)で構成されます。

企画展の内容

☆展覧会は、次のコーナーで構成しています。

- (一) 埋もれた仏たち
——出土した仏像と石山寺旧本尊——
- (二) 一木彫像の時代
——大津仏像史の最盛期——
- (三) 繊細と優美の仏
——王朝時代の美意識——
- (四) 慶派作品、大津へ
——運慶・快慶の後継者たちの造像——
- (五) 戦乱の世の仏像
——院派系仏師の作品群——

☆おもな展示作品



木造観音菩薩立像

像高九二・三センチ 延暦寺一山蔵

台座の蓮肉部まで含め、像の大半を丸彫する。癖のある笑みを湛えた表情が印象的で、微かにインド風を感じさせる。正面下腹部の品字形の衣文や背面をめぐる天衣の形式などきわめて古様。比叡山周辺の木彫のなかでも最古の部類に属する。



木造地藏菩薩立像

像高九五・八センチ 撰取院蔵

撰取院の位置する追分界隈は、かつて圍城寺領が広がっており、本像もその関連の遺品である可能性もある。表情や各所の渦文は古様だが、衣文の彫法はやや浅く、十世紀後半の制作か。右手のかまえは珍しい。



木造持国天立像(重要文化財)

像高一六〇・六センチ 石山寺蔵

武装形としては節度のある憤怒相を示し、いかにも平安時代後期の像である。素地の上に表した金銀の箔による文様が美しい。当寺は真言宗だが、このような装飾技法はどちらかといえば天台系の彫像に多い。



木造阿弥陀如来坐像 (市指定文化財) 像高三二・六^テ 真光寺蔵
 幹部前面材から地付に達する束を造り出し、幹部の前・後材も束で結着する。くわえて屈曲の大きい独特の衣文表現から、院派の仏師の作とみられる。金銅板から唐草を透彫する光背も当初のもの。



木造阿弥陀如来立像 像高八一・〇^テ 華階寺蔵
 髮際付近の螺髪や目の周辺が補修されて若干容貌を損ねるが、随所に入念な彫技がみられる。小さな渦文や松葉状に分岐する衣文などの細部の表現はいずれも快慶作品に類例があり、その周辺にいた仏師の作か。



木造如意輪観音坐像 像高三〇・五^テ 理性院蔵
 像高一尺の小像だが、材の木寄せは本格的なものである。高い華やかな宝髻、引き締まった面相、体部の過不足ない抑揚などから、力量ある慶派仏師の作とみられる。金泥塗に截金と盛上彩色による文様を表す。

大津の仏像展会期中の休館日
 4月28日・30日、5月6日・12日・19日・26日、
 6月2日

学芸員のノートから⑥

大津町の年中行事

旧大津町に遺されている史料の中には、湊町自治会の『年中行事記録帳』寛政九年（一七九七）や太間町自治会の『太間町年中行事定書』天保九年（一八三八）など、近世に行なわれていた行事の日や名称、行事の簡単な内容や実施にあたっての注意事項などが記された町の年中行事の記録が何点か残されている。これらの史料は、湊町の資料に「寛政年中行事記録帳之儀者、古来より之記録等を相改候儀ニ而者無之候得共銘々亡失之ため、今般相改、左ニ相記し候者也」と、この記録の趣旨が述べられており、年寄、五人組、年行事の署名がなされていることから、この年に現在まで行なわれていた町の年中行事を分かりやすく一つにまとめた、行事を執行する人の手引書の役割を果たすもので、以降、毎年の町内の出来事が書き綴られている。また、太間町のもは、町内で取り決めた年中行事を成文化した町定であろうと考えられる。

そこで今回は、これらに記された記録を見てゆきながら、大津町で行なわれていた一年間の町の年中行事を概観してみたい。

両町の年中行事の行事名のみを抜き出したものが次の表である。大津町の年中行事は、町内を運営してゆくための実務的な行事と信仰や親睦のための寄り合い行事に分けることが出来る。実務的な行事としては、正月と八朔（八月一日）に行なわれる御札や、町内で毎月集められた役銭や曳山を出すための費用等を七月

と十二月の半期に一度収支決算する算用寄合などが行なわれた。また、それ以外にも溝汲えや十一月には、火消し道具の改めが行なわれ、町で保管する火消し道具の点検が行なわれていた。このように、各町では町内の運営に関わる実務的な行事が多く行なわれている。これは、町を単位に課せられた役銭や諸役の負担など、幕府の大津町の支配の補完組織としての位置付けがなされているからである。ただし、町内は、大津町支配の補完組織の役割のみを果たしているものではなく、各町は、町年寄を中心として、町の転出入の管理から町内の諸費用の勘定など、一つの独立した町として運営されていた。

一方、信仰や親睦に関する行事であるが、今回取り上げた太間町・湊町は、どちらも大津祭に曳山を出す町であり、大津祭の運営に関する行事が多くを占めている。土用には、曳山の幕類や道具の虫干し、八月十六日には、四宮神社において神輿祓が、またこの日から曳山の上で囃子の稽古が始まる。九月一日には惣囃子として役員や町内の人々が集まる前で囃子の稽古の成果を発表する。これが終わると、各町では、祭りまでに曳山が組み立てられ、湊町では、二日に山奉人足請負として、祭りで曳山を曳く人足の手配（湊町では、人足は湖岸で物資の荷揚げしていた人々を頼んでいた）など、祭りに向けての準備が着々と進められ、九月九日の宵宮、十日の本祭を迎えるのである。このように、約一か月間にわたる大津祭は、町内で行なわれる年中行事の中では最大のイベントであり、注意事項や準備についても詳細に記されている。また、これは実務的な行事ともいえるが、湊町では、四月三日に、日吉大社で行なわれる山王祭の行事である大神の神事が行な

『年中行事記録帳』（湊町）より

日	時	行	事
正月	二日	年頭御札	
	十日	町汁	
	十五日	日待	
	十九日	辨財天祭	
三月	廿四日	四宮講	
	廿四日	愛宕代参	
四月	三日	町伊勢講	
	三月	山王神迎人足	
五月	十九日	四宮講	
六月	十五日	辨財天祭	
土用		虫私	
		牽山幕并道具	
七月	四日	算用寄合	
	廿三日	地蔵會	
八朔	廿四日	御札	
	十六日	神輿祓	
九月	朔日	牽山囃取	
	二日	牽山惣囃シ	
	七日	山奉人足請負	
	七日	山送り	
	九日	宵神事	
	十日	神事	
	十一日	牽山片付	
	十九日	四宮講	
十月	廿四日	愛宕代参	
		願屋開	
十一月		濱地氣加銀納	
		五人組代り	
		町内伊勢講	
十二月		火消道具御改	
		算用寄合	

『太間町年中行事記録帳』より

日	時	行	事
正月	元旦	御札	
	十五日	伊勢講	
	正月	御千度	
	正月	四宮講	
	五月十六日	伊勢講	
	五月	御千度	
	五月	四宮講	
	六月十四日	土用干	
	七月三日	算用寄合	
	廿三日	地蔵盆	
八朔		御札	
	八月十六日	神輿祓	
	九月一日	惣囃子	
	九月一日	囃子始	
	九月四日	山送り	
	九月九日	宵節	
	九月十日	神事	
	九月十一日	山片付	
	九月十六日	伊勢講	
	九月廿日	溝汲え	
	九月廿日	御千度	
	九月廿日	四宮講	
	十一月十日	御火焚	
	十一月十六日	伊勢講	
	十一月十六日	火消道具御改	
	十二月三日	算用寄合	

（行事名のみ抜粋）

われる。これは、比叡山中から切り出された大櫛が、同日の夜、西本宮から四宮神社（天孫神社）に渡る行事である。湊町では、この際の人足に関わる費用を出していた。その他にも、氏神である四宮神社に町内全体で詣る御千度や伊勢講・四宮講・愛宕講・日待といった講行事がある。これらは、正月・五月・九月の年三回（太閤町の伊勢講は十一月も）に町の人々が集まるもので、お伊勢さんや日伏せの神である京の愛宕に当番に当たった人が町の人々の分まで参詣する代参やその日に町の人々が飲食を共にして親交を深めるものである。ただし、四宮講については、一定の掛銭を積立てて、集まったお金を順に落としてゆく、いわば民間の互助的な金融組織として行なわれるものであったようである。

このように、大津町では実務的な行事だけではなく、大津祭を筆頭とした共同で行なう行事や定期的な寄り合い、親睦を深める行事が行なわれていた。農村部の年中行事が農耕のサイクルに合わせ、その節目節目に行事を行なっているのに比べ、町での行事は、愛宕講や御千度など、正月五月九月と一年を三つに分けて行なわれる言わば便宜上のものであるといえる。町内は、職種が異なったりまた、人の異動も多いことから、町の中でまとまりを持ちにくいという一面がある。従来、町の年中行事の研究は、祇園祭など、都市の最も華やかな部分に目が向けられてきた。今回取り上げた二つの町においても、年に一度の大津祭において、町内で曳山を出し、町内が一体となって一つの大きな祭礼を執り行うことは、町の結束に大きな役割を果たしている。しかし、各種の寄合や信仰的行事など、定期的に行なわれるこれらの行事もまた、普段の町内での親睦を深め、町の結束を保つために欠かす事の出来ないものといえる。今後は、祭礼のみを取り出すのではなく、町の年中行事全体の流れの中で、個々の行事の持つ位置づけを行なうことが、町の生活の実態を明らかにしてゆくためには必要であるように考える。

（木津 勝）

特別陳列「絵図に見る大津百町」報告

― 来秋の特別展「大津市民の二〇〇年」に向けて ―

平成九年二月二十八日（火）より三月二十三日（日）まで、特別陳列「絵図に見る大津百町」展を開催しました。本展では、江戸時代から明治時代初期にかけての旧大津町（大津百町）の景観変遷を、絵図と古写真などによって紹介することを目的として開催したものです。期間中の入場者は約三千名を数え、多くの市民の方に親しんでいただきました。

本展で展示した絵図には、今は無くなった船入堀とその古写真をセットで展示したり、また現在の二五〇〇分一地図に江戸時代や明治時代の地形を当てはめて復元する方法を取りました。そうしたところ、入場者の方々から懐かしいとの声を多くいただきました。大津町の景観が急速に変化するのには、やはり全国の動きと同様、昭和三十年代の高度経済成長期であり、少し年配の方たちには馴染み深いものなのです。ですからこの特別陳列の期間中に、もっと古い写真を持っているとか、別の絵図面を所蔵しているなどの情報はかなり寄せられ、現在それらの調査を順次行っているところです。たとえば、元禄八年（一六九五）に大津百町で一斉に作成された代官所に提出された絵図は七六カ町分までが残されており、全国的に見ても非常に珍しい、特異な状況なのですが、会期中に新たな同年代の絵図が発見され、残る二十数カ町の絵図の再調査も現在始めております。

また平成十年秋には、市制一〇〇周年を記念し特別展「大津市民の一〇〇年」を開催する予定ですが、その展覧会ではつい最近の出来事までを、しかも大津市全域を対象に紹介していく計画です。市民生活の一〇〇年の移り変わりを、できるだけ濃やかに紹介していきますので、さらなる情報提供をお願い致します。最後に本展に御協力いただきました方々に深くお礼申し上げます。

（樋爪 修）



れきはくインフォメーション

6月		5月		4月	
土 28	第49回学芸講座 「子供博物館見学 田上郷土史料館」 ○農耕具など生活用具約400点を展示する田上郷土史料館一室、二階館を史料館長の案内で見学します。 13時45分～15時 講師 東郷 征文(田上郷土史料館長)	土 24	第17回土曜講座 「平安時代・大津の仏教史」 ○平安京遷都以降、大津には仏教文化が開花。天台宗の法台研究に深い造詣を持つ講師により、大津の仏教史の側面を紹介いたします。 13時30分～15時 講師 東郷 昭見(大谷大学講師)	土 26	第46回学芸講座 「大津の町並み探検隊 Part II」 ○理の立て前の湖岸線を示す石垣、今はもう少なくなつた古い町屋など、隠れた史跡を探検！50年以上前の大津に案内します。 10時30分～12時 講師 福爪 修(本館学芸員)
土 21	第140回土曜講座 「七夕ごろの近江のまつり」 ○七夕は云の上達を祈る中国伝来の異文化ですが民間習俗では盆前の誤的な一面もあります。七夕飾りの知られざる側面を解説。 13時30分～15時 講師 和田 暁生(本館学芸員)	土 31	第138回土曜講座 「文化財としての仏像修理」 ○国宝修理所において長年仏像の修理に携わってきた講師を招き文化財修理の方法や苦労、新発見などについて話を聴きます。 13時30分～15時 講師 高橋 利明(奈良文化財研究所代表)	土 3	記念講演会 「大津の彫像」 ○長年、大津や滋賀県下の仏像の調査に携わってきた斯界の権威が、大津の仏像の歴史を感説します。 13時30分～15時 講師 宇野 茂樹(栗東歴史民俗博物館館長)
土 14	第48回学芸講座 「子供博物館見学 近江神宮時計博物館」 ○時計博物館には、和時計を始めとする時計資料3,500点と関係文獻が展示されています。同館を時計博物館職員の家内で見学。 10時30分～12時	土 7	第139回土曜講座 「大津京の漏刻―天智天皇の律令政策と水時計」 ○6月10日の漏刻室を前に、天智天皇の政策が何如なるもので、その漏刻(水時計)がどんな役割を果たしていたかについてを察します。 13時30分～15時 講師 林 博通(滋賀県立大学助教授)	土 10	第47回学芸講座 「やさしい仏像のみかた」 ○むずかしく思える仏像の鑑賞法ですが、そんなことばありません。小学生のみならずにも興味を持てるよう、やさしく解説します。 10時30分～11時30分 講師 岩田 茂樹(本館学芸員)
土 7	第139回土曜講座 「大津京の漏刻―天智天皇の律令政策と水時計」 ○6月10日の漏刻室を前に、天智天皇の政策が何如なるもので、その漏刻(水時計)がどんな役割を果たしていたかについてを察します。 13時30分～15時 講師 林 博通(滋賀県立大学助教授)	土 17	第136回土曜講座 「大津市内の仏像について」 ○大津市内の未指定仏像調査の担当者が、企画展に出展された新発見の仏像について解説します。 13時30分～15時 講師 岩田 茂樹(本館学芸員)	土 17	第136回土曜講座 「大津市内の仏像について」 ○大津市内の未指定仏像調査の担当者が、企画展に出展された新発見の仏像について解説します。 13時30分～15時 講師 岩田 茂樹(本館学芸員)

〈企画展〉
大津の仏像 ―一千年の造形―
4月26日(土)～6月8日(日)

収蔵品紹介 27

ミニチュア炊飯具型土器

近江神宮蔵(本館寄託)

当館が寄託を受けている近江神宮所蔵資料は、蓮華紋方形軒先瓦を初めてする白鳳期の瓦類が中心となっていますが、大津北郊地域に群集する後期古墳から出土した土器類も多く含まれています。今回紹介するミニチュア炊飯具型土器のカマドもその一つです。

このカマドは、滋賀里仙果園付近(いまの熊ヶ谷古墳群か)から昭和一三年に出土したと伝えられており、釜口(口縁部)と庇の一部が壊れているだけで、原形をよくとどめています。器高二〇センチをこえる大型品で、筒状に近い丈長の胴部に縦長の半円形状の焚口が切られています。焚口の周囲にはやや幅の広い庇が付けられており、胴部の中ほどには幅の狭いツバが巡り、左右一対の三角形の把手が付くなど、カマド出土例の中では比較的丁寧に作られた例といえるでしょう。

ミニチュア炊飯具型土器は、県内では大津北郊地域の後期古墳(六く七世紀)にのみ見られる特徴的な副葬品で、本来、カマド・カマ・コシキ・ナベの四点がセットになって横穴式石室内に納められているのですが、本例はカマドのみで、他の三点については出土の有無など詳しいことはわかっていません。

また、この一群の土器は、実用のカマドやカマなどを模して小型に作ったもので、死者とともに古墳に納める目的で製作された土器です。したがって、実際に使われた痕跡、例えば火を受けた跡などは認められていません。

(松浦俊和)



※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい。